

<民衆宗教・日常性の思想の深度>

生き神思想の歴史的意義

小澤 浩

(元富山大学・大東文化大学非常勤)

今から半世紀前の1958年、宗教史家の村上重良が『近代民衆宗教史の研究』を著し、幕末から近代にかけて集中的に現われてくる天理教、金光教などのいわゆる「民衆宗教」の民衆解放思想としての歴史的意義を明らかにしてから、「民衆宗教史」と呼ばれる一つの流れが形成されてきた。それは「民衆思想史」の登場と時期的に重なっており、研究者もこの両方に関わっていることが多い。当初これを担った人たちは、マルクス主義の社会観から少なからぬ影響を受けつつ、民衆の主体形成における内面過程の問題に関しては、いわゆる人民闘争史観では役に立たないという認識に立ち、ヴェーバー・大塚説などにも学びながら、独自の方法論を模索してきた。思想史家安丸良夫の「通俗道徳説」や「社会的意識形態論」などはその成果を代表するものと言えよう。

筆者も、安丸説に多くを学びながら、とくに天皇制イデオロギーの支柱だった国体論における「現人神」の思想が、民衆の宗教意識とどう関わり合っていたのか、という問題を自らに課して検討を進めてきた。その結果、私が幕末の民衆の自己確立・自己解放に寄与し、やがて現人神の思想に複雑な過程を経て包摂されていく、伝統的な背景を持った独自の宗教思想として見出したのが、幕末民衆宗教における「生き神」の思想である。この問題に関する論考をまとめてから20年になるが、本報告では、この間に生じた新たな疑問や論点なども加えながら、改めて「生き神思想の歴史的意義」について考えてみたい。

その際、予め考えておきたい前提が二つある。一つは、人間を容易に神格化し、神を著しく人間化して捉える心性、それを仮に「ヒトガミ」的な観念と呼ぶとすれば、そうした観念が、少なくとも近代の終りまで、人々の宗教意識の「古層」に脈々と流れていた、と思われる点である。そして、もう一つは、民衆宗教をその体内から生み出した近世という時代が、切支丹への苛烈な弾圧から始まっている、ということの意味である。

切支丹の弾圧については、明らかにそれと因果をなすと思われる民俗的な信仰の見かけ上の隆盛を手放しで評価する議論が横行しているが、かつて歴史家の井上清が強調したように、「これにより日本人の哲学的・思想的成長、とりわけ、将軍や天皇をも超えた高い価値の認識と人間平等観の成長が著しくさまたげられた」(『日本の歴史』上)ことの民衆に与えた影響は計り知れない。直接的には「寺檀制度」の強制と寺院の機能の「仏事」への限定によって、民衆の「現世利益」の要求は村に寄生する職業的な宗教者の手に委ねられ、人々の意識は、彼らの振り撒く俗信・俗説の中に閉じ込められていった。その内的な呪縛を振りほどくことがいかに困難であったかを示す文献には事欠かない。

しかし、やがて、人間の幸・不幸の問題を祟り神や禁忌といった外在的要因ではなく、人間自身の生き方という主体的・内在的な契機に求める考え方が、長いトンネルを抜けて、再び民衆の心に灯をともし始める。その具体的な事例を、私たちは流行り神、入定行者のミイラ信仰、富士講6世の食行身祿の思想、義民信仰などの中に見出すことができる。そのいずれもが、ヒトガミの観念の系譜だったことは示唆的だが、その先に現われてくるものこそ、幕末の民衆宗教に他ならない。

幕末の民衆宗教は、呪術からの解放、自己中心的生き方への反省、徹底した人間平等観、鋭い社会批判、権力の抑圧に対する抵抗など、総じて開明的、変革的な思想を共有していたが、問題はどのような宗教思想の特質がそれを可能にしたのか、という点である。夫々の「親神」の性格が超越的・絶対的なものだということはとりあえず重要だが、教祖らは他方で、人間はみな神の働きを心に宿した「神の子」とであると説いた。この「人間神の子」観が、封建的・身分制的観念の呪縛から人々を解き放つ上で果たした役割をとくに重視したい。私が「生き神」と呼ぶのは、そうした内容を持つ「神の子」観のことだが、それこそはヒトガミの伝統に変革の息吹を与えたものと言えよう。しかし、やがて現れる「現人神」も、思考の様式としてはヒトガミを母体としたものに他ならない。この「生き神」思想が、「現人神」の民衆への抑圧に屈服させられていくのも、それへの対抗思想としての意義を担い続けたのも、ヒトガミという伝統的な思考の様式によらざるを得なかった日本の近代の特質が生み出したものと言えよう。従って、この生き神思想の歴史的役割は、天皇制国家の崩壊、天皇の「人間宣言」をもって一応の終結を迎える。